

5 歯科衛生士学科「歯科補綴学」合同体験実習の試み

○野村章子¹, 木戸真紗美², 小野真奈美², 渡邊美幸², 江川広子²

¹明倫短期大学 歯科技工士学科, ²明倫短期大学 歯科衛生士学科

keywords: 歯科補綴学, 合同体験実習, 概形印象採得, 咬合紙診査

はじめに

歯科補綴治療の現場において歯科衛生士が歯科診療補助を確実にを行うためには、歯科医師の診療行為を理解しておくことが重要である。そこで、実施頻度の高い概形印象採得および咬合紙による咬合診査（以下、咬合紙診査）を学生参加型授業テーマとし、学生間の相互反応、相互影響を重視する合同体験実習を試みた。

対象および方法

歯科衛生士学科臨地・臨床実習終了間近な3年生6名および同実習を開始する2年生63名を対象とした。

9月15日（火）3限に、歯科衛生士学科3年生6名への事前指導・打ち合わせを、歯科医師教員1名と歯科衛生士教員2名が附属歯科診療所で行った。

9月28日（月）1限に、歯科衛生士学科3年生6名が概形印象採得および咬合紙診査について2年生63名へ示説する合同体験実習を教員の支援のもとで行った。基礎実習室の診療ユニットを使用し、2年生10～13名と3年生1名によるグループ単位で試行した。

実習終了後に学生全員による無記名式アンケートを実施し、その回答をもとに教育的効果を検討した。さらに、担当教員5名の感想をとりまとめて次年度への対策とした。

結果および考察

教員による3年生6名への事前指導・打ち合わせでは、概形印象採得および咬合紙診査の手技を制限時間内に理解させることができた。続いて実施した2・3年生合同体験実習では、3年生の積極的な説明態度が見受けられ、2年生も熱心に参加していた。

アンケートの結果では、3年生の50%が概形印象採

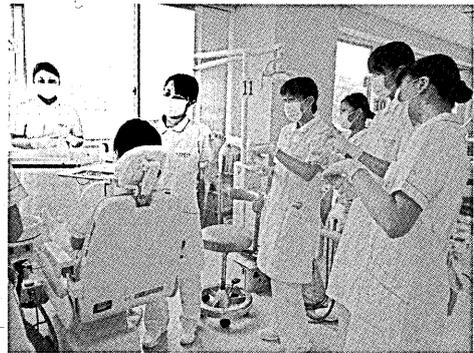


図 3年生が示説する手技を2年生がイメージする

得を、85.4%が咬合紙診査の手技を説明できたと回答し、さらに全員が2年生の実習態度をよいと評価した。なお、概形印象採得や咬合紙診査の手技をよく説明できなかった学生は、教えることが初めてであり緊張したと答えていた。一方、2年生の80%以上が3年生の示説がわかりやすい、説明態度がよいと回答した。実施時期については、両学年ともに約70%がよいと回答したが、より早い時期を望む、全員一斉での実施が十分な体験につながらなかったという2年生数名の否定的意見もあった。

担当教員間では、3年生の患者指導トレーニング効果、2年生の臨地・臨床実習への導入効果があったとの評価と、実習内容をより充実させるためにはグループ分けおよび2年生への直前講義が必要という次年度への課題が得られた。

まとめ

今回試行した2・3年生合同体験実習は、上級生の責任感と下級生の協力意識がうかがえる内容であった。今後は歯科補綴学の講義とのつながりを強化し、実施時期と回数、3年生の責任体制などについて検討する。